



Title	Cynewulf's Elene試訳(その3)
Author(s)	金山, 崇
Citation	大阪外国語大学学報. 1977, 39, p. 79-100
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80662
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Cynewulf's Elene 試訳（その三）

金 山 崇

Cynewulf's Elene—a Translation (3)

Atsumu KANAYAMA

With this installment I conclude my translation of Elene, an Old English religious poem of 1,321 lines edited by Pamela O.E. Gradon and included in Methuen's Old English Library.

I take this opportunity of acknowledging my great indebtedness to C.W. Kent's edition of the poem published in the previous century. Parts of it are dated and need revision and yet its glossary has benefited me with its near exhaustiveness. I am also grateful that Krapp's edition with its meticulous and scholarly apparatus and Gordon's and Kennedy's translations with their clear prose have all helped to enhance my understanding and appreciation of the poem.

viii

神に^{よみ}嘉されし女^{ひと}、エレネ、供奉の 620
武者達前に、齒に衣着せず応酬す。
「若し汝にして、天国に諸天使と共に
住いし、地上に^{いのち}生命を、天に勝利の報いを
受けんと志あらば、疾く我に告げよ、
天が君のかの十字架、大地が懷に 625
神々しき様して、その何処に^{いずこ}留まりて
存るや、汝等その犯せし罪故に、暫し人目
より蔽せしものを。」と。ユダ応じて言う——
彼が^{うち}心内に悲しく、胸熱く燃え、若し
かの木の所在明かさずば、彼が眼に 630
天国の輝きその光衰え、又此処天が下の
王国を諦むの重なる悲運に苦惱せり——
「かく遠き昔に、幾多の歳月経るうちに
起こりし事、何条我に知り得んや。
数多年月の既に過ぎぬ、数えてはや二百、 635

否そに勝らん。その数知らぬ今、我
詳らかにするを得ず、事より後、我等に
先立つ思慮深く善なる人等、智者早や
幾多失せたり。我それより後の世に生れて、
若く、幼児なりき。かく遠き昔に 640
起こりし事なり、我胸中に、我の知らざる事見出し得ず。」と。
エレネ、彼に答えて言う。

「汝等、戦いにてトロイア人等の
打ち建てし勲の数々、様々なるを
一つ余さず心に留めて忘れず、 645
此の事の、此の民等がうちに見らるるは
如何な訳にてぞある。かの事は、
治く知られたる往昔の戦、此の気高き
出来事に比ぶれば、流るる歳月が内
遙かに遡りて古きものなり。汝等立ち所に、 650
戮されし人等の、楯襖が下に死して
斃れし槍武者等が総数、誤たず説くを得。
汝等、岩崖が下なる墓、又其の場所、
又その年月をも文書に記録したるなり。」と。

ユダは言いぬ—— 悲しみに耐えたり—— 655
「女王よ、我等此の戦の事、止むなく
凡そその儘に記憶に留むるも、そは我等
戦の嵐を、人々が行いを文書に書き連ねし故なり。
されど此の事に至りては、如何な人の口
に依りても世に告げらるるを聞かず、 660
今、此处にてが初めなり。」と。

貴き女王、彼に答えて言う。
「汝、かの生命の木につき、真実と正義
に抗う事目に余る激しさなり。汝、先つ方
汝が民人等に、勝利の木につき真実 665
語りしに、今又嘘言を吐く。」と。
ユダ、妃に言葉返して言う、彼此の言葉、
大いなる悲しみと疑いのうちに吐き、
汚辱の苦しさを恐れぬ、と。帝が縁者直ちに答う。

「やよ、我等、ゴルゴタが丘の上にて
君が御子、神が霊の子、架につけられしを、
聖なる書に依りて世の人に告げられ
たるを聞く。汝、聖なる書の語る如く、
その場所につき知る処を余さず披瀝
すべし、数々の罪故に破滅が、死が
汝にとりつかぬうち、そのゴルゴタなるは
何処なるかを。我今より、主の御為に
そを清めん、世の人を救わんが為め。
かくて聖なる神、力まされる君主、
我が心に、世に栄光授け賜う君、
生命の内なる思いを、我が望みを満させ
賜うなり、靈魂が救い主は。」と。ユダ
妃に頑と屈せず答えぬ。「我其の場所を
知らず、其の土地も有様も露存ぜず。」と。
エレネ心に憤りもて言う。
「我、神の御子、架につけられ給いし
かの神に依りて確かと申す、汝
此の嘘言棄て、我に真実を披瀝せざるか
飢えにより、縁者等が目の前にて
その生命奪わるる事必定。」と。
妃次いで、供奉の者等に命ず、
此の罪深き男、殺さず連れ行き、
押し込めよ——仕うる者等応とばかりに従う——
乾上がれる井戸が中へ、と。其処にて
かの男数々の喜び奪われ、七日が間
悲しみのうちに留まる、獄舎に飢えに
苛まれ、枷かけられて。やがて七日間、
苦痛に弱り、疲れ果て、食も無く——
力衰えたり——大声にて呼ばわりぬ。
「天国の神に依りて、我汝等に誓願す、
此の責苦より我を引き上げさせ給え、
飢えの仇によりみじめなるこの我を。
我かの聖なる木進んで示さん、飢え故に

670

675

680

685

690

695

700

耐えられず、なお隠し通すことの叶わぬ今。
この虜囚、時の過ぐるにつれてかくも苦しく、
その辛さかくも差し迫り、この責苦かくも
厳し。我続けて生命の木の事隠すに耐えず、
曾ては愚かなる思いに染まり、今此の身
遅まき乍ら真実に目覚めたるも。」と。 .viii.

705

武者共統べる女、其処^{ひと}にてこれ聞き、
この男が振舞い見てあるが、直ちに命じて
^{おとこ}漢を狭き所より、地中が牢より
窮屈なる棲家より引き上げさせぬ。

710

彼等時移さず、直ちに命行い、
妃の命ぜし所、此の男を獄の内より丁重に
^{あない}案内して出しぬ。次いで彼等剛毅なる心
もて、昔主の、天国の護り主、神の御子の
架につけられ給いし丘を上へと昇り進みぬ。

715

されど彼、飢えに衰えて定かには知らず、
かの聖なる十字架、裏切りに依りて大地の
懷に包み込まれ、久しく其の奥津城に
動かず、世に知れず、死の床に留りて
在るは何処かを。其の時彼、

720

勇気示し、声挙げてヘブライが言葉にて叫びぬ。

「救い主なる大君よ、裁きの力持つ御方よ、
その栄光の力によりて、天と地と、
逆巻く海原、渺渺たる大海と万物を
創り賜いし御方。その御手にて
此の地上皆べてと天空を

725

測り分たれし御方。大いなる光輝もて、
光に包まれ大気がうちを飛翔する
いと高き天使等が集いに

730

自ら君臨^{さか}さる勝利の支配者なる御方。
人の性持^{さが}つ者、其処へ、俗世の道
離れて、かの輝ける集いへ、
栄光が先触へ、昇り入ること叶わず。

735

これら創り成し、御自らが僕と
なされし聖く、神々しき御方。
かかる身分がうち、又六つの翼
其の周囲取り巻きて飾られたる 740
六人が者、名指されて永遠の喜び受く。
美しく輝けり。それらがうち
四人ありて、翔ぶうちに、
永遠の審判者照覧あるうちに、
栄光に輝きて、不断に其の勤め尽くし、 745
栄光がうちに、澄める声もて
天帝が讃歌、いと妙なる調べ
頻りに歌い、其の声清く澄みて斯く
言う——其の名はケルビムなり——。
『大天使等が貴き神は聖なり、 750
万軍の主は。天と地、此の栄光に
満ち満ちて、高き御力ぞなべて
栄光もて天下に示されぬ。』と。
彼等がうち二人、天に人セラフィムと
呼ぶ勝利者達あり、彼等樂園と 755
生命の木、炎の剣^{つるぎ}もて汚れより
守らざるべからず。鋭き刃^{やいば}鳴り震え、
鈍^{にぶ}置きたる剣震えて、其の色変化す、
堅く拳に握られて。主なる神よ、
貴方は永遠にこれを統べられん、 760
又貴方は、思慮浅く、罪に穢れし
罪犯す仇を天上より投げ棄てらる。
その哀れなる奴原、暗き棲家へ、
責苦の破滅へと墮つるが定めなりき。
其処では彼等、今しも押し寄せる炎が内に、 765
龍の腕に抱えられし暗闇に包まれて
死の苦悶に耐えいるなり。彼奴、
御威光に刃向いぬ。為に彼、悲惨のうちに
穢れが中の穢れに染まり、爪はじきに
耐え、苦役の身に堪えざるを得ず、 770

其処にては彼、御言葉に逆らう事叶ず、
 皆ての罪の張本人、仕置き如何様にも
 逃れ得ず、責苦に縛られてあるなり。
 天使等が主よ、かの架にかかり、
 此の中が世に、マリアにより、人の子の
 形成して生れ給いし彼の人、天使等が主の
 世を統べんとの御意あらば、—— 若し
 彼の人、罪障無き息、主が御子ならずば、
 此の世に生きて在るうちに、斯くも多くの
 真の奇蹟、絶えて行われざりしならん。
 又、諸国民が主よ、若し彼の人の、
 あの輝ける光により、栄光の御子ならずば、
 人等が前にかく栄光がうちに死より
 蘇らせ賜うこと夢なからんに—— 天使等が父よ、
 いざ御徴を明かし給え。かの聖きモーゼの
 祈りし祈り、力の神よ、嶮しき山の麓にて、
 かの輝かしき時に、彼にヨセフが骨を示して
 願ひ聴き届けられし如く、万軍の喜びなる御方よ、
 御意ならば、かの輝く御方に依り、久しく
 人目より隠されし宝を我に、靈魂が造り主よ、
 開かれん事を願う。生命の創り主よ、さて
 此の地より、天空が拡がり下、
 心地良き煙一筋、漂い立ち昇らせ給え。我
 更に信仰厚く、信を、揺がぬ望みを、
 かの架にかかり給いしキリストに、更に
 迷う事無く置かん、又彼の人こそは
 真、魂が救い主、永遠にして全能、
 イスラエルが民草の王、とこしえに
 終り無く、天上にて
 栄光の、久遠の館の
 持ち主なることに。」と。

775

780

785

790

795

800

其の折りしも、天空が下、煙に似て
 一条の水気其の場より立ち昇りぬ。
 此の男が胸の内、揚々と晴れたり。彼
 双手もて、心嬉しく、法の智深く、高く 805
 天上へと打ち合わせたり。ユダ、
 思慮深く、言いぬ。「これにて我、誠に
 身をもて知りぬ、固き心にも、貴方の
 此の中が世の救い主なる事を。万軍の主、
 栄光の高御座に即き給う貴方に永久の 810
 感謝あれ、斯く憐れにして、又斯く罪深き
 私に事の秘事、栄光に依り顕わし賜える故に。
 神の御子よ、世の皆ての王が華なりとて君の
 世に知られ又生まれ給いし事知りし今、
 万人に喜び授く御方よ、願わくば 815
 万物の君よ、幾多の折りに我が犯せし
 罪の事ども、これより後は御放念
 あらんことを。力ある神よ、我を
 貴方の王国の数がうちに加え、
 かの輝く都に、数多聖き方々と共に 820
 住いさせ給え、其処に我が兄弟、
 拳のうちなる石もて打たれたるも彼、
 ステファーマス、貴方への信義失わず為に
 栄光に包まれ崇めらるるなり。彼戦いの酬を、
 終りなき栄えを享く。彼が為せし奇蹟 825
 書に、書き物により世に知らる。」と。
 次いで、彼心勇み、かの栄光の本求めて
 心只管に、芝土を下へ、地堀り始む、
 が二十呎進みし所に見出しぬ、
 隠されて在るを、険しくそそり立つ崖が下、 830
 暗き棲家が内に匿されあるを——彼
 其処にて三つの姿に遭う——
 痛ましき様して、十字架の共に在るのを。
 そは、其のかみ、ユダヤが民等にして

神敬わぬ奴原数多の、土にて隠せしままの 835
姿して、砂に埋もれいたり。奴等、
神の御子へ憎悪煽りぬ。罪の張本人が
教え聴かずば、如何で彼等、斯かる
所行をば為さん！此処においてか彼が心
大いに歓喜す、その思い聖なる木によりて 840
勢いづきぬ。その胸の内、大地が下に
聖なる御徴見て息吹きぬ。彼手に栄光の
喜びの木抱え、大地が墳墓より、人等と共に
引き上げぬ。旅人等進みぬ。
大将等かの町が中へと。 845
堅き志の従者等、エレネが膝前に
三本の勝利の木、見ゆる様おろしぬ、
誇りに胸ふくらせて。妃、心中に
此の業喜び、次いで尋ねたり、
此の木が何れの上に、大君が御子、 850
人等に喜び授くる御方の架けられしかを。
「やよ、聖なる書がうちに我等聞きぬ、
御子と共二人の者苦難蒙け、御子の
架につかれしは三人目なり、又其の恐ろしき
折り、全天かき曇りし事の御徴もて 855
告げらるるを。此の三本のうち何れが
上にて、天使等が主、栄光の護り主の
受難され給いしか、汝知る所を述べよ。」と。
ユダ妃に——彼よく弁えず——
此の勝利の木に就き、救い主、神が 860
勝利の御子、其の何れが上に架けられしか、
詳らかに告ぐるを得ず。やがて彼命じて
その栄光が町の真中に柱三つ、喚声が
うちに立てしめ、己れ等に全能の神、
その栄光の木に就き、衆が面前にて 865
奇蹟行わるる迄留めしむ。
勝利喜ぶ人等座す、三つの架を
囲りて賢き人等、歌声挙げて。

九つ刻とはなりぬ。時に衆数多、
 少からざる人々其処に來たり、 870
 黄泉路につきし人一人、棺台に載せ、
 近隣の人等に囲まれて、運び
 來ぬ、——時は九つ刻——
 魂抜けし若き人を。其の折、ユダ
 其処にて、心大いに喜びぬ。 875
 彼そこで命じて、魂失せし者、
 命奪われたる体、生命無き者、を
 大地に置かしめぬ。次いで堅き心もて
 此の眞実の知らせ人、双腕にかの架の
 二つ、深き思慮もて掲げ、死せる館 880
 が上に翳しぬ。館、前に變らず生氣無く、
 動かず横たわる肉体にして、手足冷たし、
 痛ましき様一面に見えて。次いで
 第三の架、聖なり、掲げられぬ。
 骸は待てり、乃が上に君が十字架、 885
 天国が王の木、眞実の勝利の徴の
 翳さるるを。彼直ちに
 魂備わりて立ちぬ、肉体も魂も
 二つ乍ら共に併せ持ちて。人等が内に
 称揚の声高く上がり、父崇め、 890
 主の眞の息を言葉もて
 讃えぬ。御子に栄光と
 万物の感謝の永久にあらんことを。

其の時人等が心内に深く刻まれしは
 ——永久に彼等斯くあるべし—— 895
 万軍が主、生命の先達の
 人救わんが為なせし奇蹟がこと。
 折りしも、其処に、嘘偽の罪犯し、
 翔ぶ怨敵、空中へと昇りぬ。
 時に地獄が悪魔、恐ろしき怪物、 900
 惡の道忘れず、問いて言う。

「やよ、往昔が争いによりて、
再び我に従う者滅し、宿怨重ね、
我が持ち物を荒らす、これ如何なる者ぞ。
こは果つる事無き争い。罪働く魂、 905
最早我が掌中に留まるを得ず。
今や来たり、我既に罪業に縛りつけ
おほせたりと思ひしに仇、我より権利を、
財を一つ全さず奪い去りぬ。
こは断じて公平なる処置ならず。 910
ナザレの町に育ちし救世主、
数多の禍、憎しみの重き掣肘、我に
加えぬ。長じて若者となりし頃より
忽ち、我に持つ物を飽かず己に向けぬ。
我、今や何事にまれ真に功を奏する 915
望みなし、彼が御国、中が世に
広く行き互り、我が支配、天空が下
衰えたり。我に此の十字架
輕悔の心もて輕んずる心無し。
如何に救世主、しばしば狭き棲家に 920
我閉じ込め、惨めなる悲しみ与えし事ぞ。
我ユダによりてそのかみ、
幸い得たりしが今や、又ユダによりて
卑しき身に落とされ、財奪われ、爪はじかれ、
友失う。されど我めげず、罪の行いにより 925
墮地獄より手向為す手段見付け得ん。
我汝を迫害せん、別の王唆かして、
汝にかからせん。彼汝の教えに背き、
我が悪業に加担し、汝をいと暗き
恐ろしき責苦の恐怖に送り込み、 930
為に汝、苦惱に罰せられ、
これまで従ひし、架につかれし王に
決然刃向うこととならん。」と。
其の時ユダ、彼に向かい、
思慮深く、勇猛の士答えぬ——聖霊 935

灼熱の愛、彼が心にしかと授けられぬ、
熱誠ある知力、聖なる御方の^{はから}慮いにより——
知慧に充ちて彼、斯く言いぬ。

「汝、罪業に心掛け、斯く激しく勢もて

悲しみ繰り返し、争いを起こさん

940

要なし、悪業が大悪玉よ。かの強き主、

汝、罪働きしを、^{さち}幸奪いて

深き淵を下へと突き落さん、拷問の

奈落へと、その言葉もて幾多の死人

945

起こせし御方は。汝愈々明らかに知れ、

汝愚かしくも、光のうちに輝けるを、

主の愛を、かの美しき喜びを棄て、

それよりは、地獄の業火がうちに

拷問に身を縛られ、火に焼かれて

出ずるもならず、怨み抱きつつ

950

其処にて永久に^{とわ}刑罰を、

終り無き不幸を、忍ぶ定めなる事を。」と。

エレネ、此の仇と此の友、

栄光に充てるものと邪悪なると、

罪深きと祝福されたと、互いに争う様

955

聞きたり。此の地獄が仇、罪の張本人、

負かざるを耳にして、心愈々嬉しく、

此の男が知慧に、^{かやつ}彼奴、如何で斯くも

短かき^ま間に、斯く信仰深く——斯く無知

なりしに——心思慮に充たざるに至りしか

960

と驚き怪しむ。妃、神に、栄光の神に

謝す、神が御子によりて、己が望み、

勝利の木、目のあたりにし、且つ此の男が

心中に信仰、輝かしき恩寵の宿るを斯く

明らかに認めて、双つ乍ら適えられし事を。

965

やがて其の^{くにうち}国内に知れ互り、

^{くにたみ}国民が^{うち}間に広く伝えられしは

輝かしき朝の^{あした}報せ。主が^{おきて}律法を暗きに

匿さんと志す者等多くには、苦の種となり、
 大海原取り囲む津々浦々が砦に 970
 町に一つ全さず披露さる、キリストが
 十字架、遠き昔大地に埋められて在り、
 天が下、聖く、掲げられて、これに優る
 もの前代後世にも無き。
 勝利の徴、見出されたり、と。 975
 してこれ、ユダヤが民にとり、
 憐れなる人等にとりては悲しみの
 極み、いと憎き出来事なりし——彼等
 世の人が前にそを変うる事能わず——又
 キリスト教徒が喜びなり。そこで女王、 980
 武者等が隊の隅々迄命じて、
 時移さず使者立てて旅立たせよと、
 彼等大海原を越え行きて、ローマ人等が
 主君必ず訪い、武將直々に此のいと大いなる
 吉報告ぐるべし、勝利の木、遠き昔 985
 隠されて聖き人等又キリスト教徒等が心
 悲しませしが、造物主が恵みにより、
 見付けらる、大地が中に見出さると。
 王、此の輝かしき報せに心楽しく、
 魂も歓喜す。町々に黄金燦めく装いして 990
 尋ぬる人のひきも切らず、遠方より訪う。
 東よりの使者等、彼侍大將にもたらせし
 吉報、王心躍りて、此の世にて
 いと大いなる慰めとはなりぬ、彼の人等
 女王共^{とも}に、白鳥が道越えて 995
 恙無き旅終え、ギリシャ人等が国に
 着きぬと。帝、使者等に命じて、
 大急ぎ再び旅のこしらえなせと。
 人等、此の返答、君主が御言葉
 聞くや其の場に留らず。 1000
 彼、若し彼等、豪勇の武者、
 海原乗り切り、聖なる町へと

恙無く旅し終せば
 エレネ、勇ましき戦妃^{いくさひめ}には
 よしなに伝えよ、と命ず。 1005
 コンスタンチヌス更に又、
 此の使者等に命じ、エレネに二人が為、
 かの丘の中腹に御堂を、
 ゴルゴタが丘に大神が神殿を、
 キリストが御為に、世の人救わんとて、 1010
 かの聖き十字架、地に住む人此の地上にて
 尋ね当てし、いと輝かしき木、
 その見出されし処に、建てんよう
 指図あれ、と。妃、喜びが友西より
 数々の嬉しき使りもて、海の砦 1015
 越え来たるや、其の命を果たしぬ。
 時に女王、命下して諸国に
 腕前に長けし者等求めしむ、
 いと優れし者、石組^いみいと巧みに
 為すすべ心得し者、あの野に、 1020
 かの魂^{たま}の守護主、天より妃に
 告げし如くに、神の御殿建つ技心得し者を。
 妃命じて、其の十字架^{こがね}、黄金、
 宝玉、いと高貴なる宝石もて飾りなし、
 腕を尽くして細工成し、更に白銀^{しろがね}の箱 1025
 が内に錠おろして納めしむ。其処に
 かの生命の木、いとめでたき勝利の木、
 爾来変らず聖く、犯すべからざるものと
 はなりぬ。其処には弱き者等が為、
 皆ての苦しみに、争いにはた悲しみに 1030
 救い不斷に用意されており、彼等、聖きもの、
 神が恩寵により、其処に忽ち救い見出さん。
 斯くて又ユダ、幾許か月日経ちて
 バプテスマ受け、罪業清められて
 キリストに信じだき、生命の借り主 1035
 に愛しき者となりぬ。彼が信仰、心に

不動のものとなりぬ、慰めの聖霊、彼が胸
に宿りて、彼悔い改むるに至りし時に。
彼、より良き物、天国の喜び採り、
より悪しき物、悪魔への心尽し棄て、 1040
邪宗と悪しき信仰絶つ。ユダに永遠の王、
造物主、神、力の支配者、慈悲を垂れ給いき。

• x iii •

其の時彼、バプテスマ受く、
幾度も・・・来し人は、
肝に銘じて前非悔い改め、天国に 1045
目を向けぬ。而り、運命、彼
此の世にて神に斯く信仰深く、
斯く愛しきもの、キリストのめでの所と
なるべく定めたり。此の事の知れ互れるは、
エレネ命じて、ローマの司教 1050
エウセビウス、知慧いと秀れたる人に、
此の聖なる町へ、人等が評議に
手を貸すべく、議の場へと迎えを
遣わせし時なり、そはそも
彼によりてユダをエルサレムが町内^{うち}にて、 1055
聖職に就け、其の才幹により選ばれて、
神が御殿へ、聖霊の恵みにより、
国民が司教と為さんがためなりき。
妃、後ユダに、英知もて
キリアクスなる名、新たに与えぬ。 1060
此の男が名、これよりは、町にては、
より良き名「救世主が信仰」とはなりぬ。
さてエレネ、未だいたく心に懸けしは、
かの救い主が御足、又御手をも
貫き通りし釘、それもて十字架に 1065
天の支配者、力ある主の打ちつけ
られしものに就きての輝やかしき出来事
なり。キリスト教徒等が女王、それに就き

問い、キリアクスに乞い、
 彼、聖霊が御力により、此の不思議なる 1070
 事に就き、尚此の上も我が望む所
 満たされよ、栄光が恵みによりて
 我が蒙を開かれよ、と。妃、口開きて
 恐るる処無く、彼の司教に申さる。
 「人等が守り主よ、かの尊き木、 1075
 その上にて異教の手にかかり魂が救い主、
 神御自らが子、人等が救い主の架に
 つけられ給いしもの、我に偽り無く数えらる。
 尚も知求むる心、我が胸にかの釘を思い
 起こさしむ。願わくば汝、地中になお 1080
 深く埋められ、秘やかに闇に隠され在る
 そを、見出し給え。我が心、永久に
 悲しみ、悲しさに嘆き、休まるを知らず。
 全能の父、万軍が支配者、人等が救い主、
 釘現わし賜いて、聖なり、いと高き所より 1085
 我が望み適えさせ賜うよう、さて汝、
 いよめでたき使者よ、直ぐ様いと恭しく、
 汝が請願、かの輝ける御方に差し向けよ、
 勇士等が栄光に向いて祈れ、全能の王に 1090
 尚も人等に知らせず、隠され
 秘かに留まる地下の宝、
 汝に知らせ賜えと。」と。
 斯くて此の聖なる人、人等が司教、
 心打たれ、心中堅く誓いぬ。
 心喜び、人々、神讃うる人等が一隊と 1095
 共に出で発ちぬ。斯くキリアクス、
 彼が顔容熱誠こもり、ゴルゴタが丘に
 頭を垂れぬ。彼が心中包み隠す事無し。
 彼いと恭々しく神に呼び掛け、此の
 新たなる苦境にありて、天使等が守護者、 1100
 此の隠れし物、我に顕わし賜え、此の野の
 そも何処に我、かの釘に会おう事を

得んや、と願う。其の時、
 彼等眺めるに、父、慰めの聖霊、
 炎の形せる御徴、立ち昇らせ給う、 1105
 人等に阻まれ、奸智によりて
 かのいと貴き釘の地中に隠されて
 在る所より。其の時突如として
 陽より明るき火、めらめらと
 上がりぬ。人等、喜び授く彼等が神、 1110
 目の前に奇蹟行われたるを知る、
 其処に、隠れし処より天が星はた
 天の宝石に似て、地に近き所に釘、
 其の囚れの身より、下の方にて輝きつ
 明るく光りぬ。人等喜びぬ。 1115
 欣喜雀躍、皆一つ心にて、神に向い言う、
 彼等キリストの道に脱れ、^{はず}悪魔が
 もたらせし破滅が故に、
 邪教がうちに過ぎ越し来たりしが。
 「我等今や目のあたりに 1120
 勝利の徴見る、神が^{まこと}真実の奇蹟を、
 我等これ迄嘘言もて抗い来しが。
 今や彼の事のいきさつ光当てられぬ、
 事顕わされたり。天国が神、
 高き処にて其の栄光あらんことを。」と。 1125
 其の時、神が御子により、悔い改めし人、
 人々が司祭、新たに歓喜せり。彼
 其の時、怖れ震きて其の釘手に取り
 尊き妃が許へ持ち来たりぬ。キリアクス
 かの貴き妃の命ぜし処、彼の女が 1130
 望み、皆て満たしぬ。時に其の頬上に
 哀の輪、熱き涙滂沱たり。
 涙、細く金^{かね}編みし上に落つれど
 そは断じて悲しみが故にあらず。妃が
 望み輝やかしく充たされぬ。妃、輝やく 1135
 信仰もて跪き、もたらされて己が悲しみ

慰めし賜物、喜びに胸躍らせ拝す。神に、
 勝利が神に、謝したり、世の始めより
 人等が慰めとて、遠きそのかみより
 しばしば叫ばれおりし真実、それを 1140
 知るに至りし事を。妃、知慧が賜物
 に心充たされたり。
 又聖き天上の霊、宿り賜い、
 妃が胸に、高き心に住いす。
 斯くて全能、勝利の神の御子、 1145
 妃が身を爾後守護し賜いしなり。又、

• x iv •

其の時妃、霊の神秘によりて
 心に信仰を、栄光への道を求む。
 誠に、人等が神、天上の父、
 全能の王、手を藉し給いて 1150
 彼の女王、其の願い、此の世にて
 果し終んぬ。賢者等によりて此の予言、
 後一つ余さず起こりし如く、
 既にその始めより歌われいし事なり。
 民等が女王、聖霊が恵みにより 1155
 頻りと求めぬ、いと心籠めつ、
 かの釘、人等が慰めとなすに、
 如何に用いてぞ最も良く、最も輝やかしき
 ものとならん、主の御意これに就き如何と。
 妃、次いで命じていと賢き者、 1160
 疾く評議が場へ連れ来たれ、
 賢き力により良く助言知る者、
 心に熟慮持てる人を、と。
 これに就き彼に問い給いて、彼が
 心中に最も良しと思わる方策如何にと。 1165
 して彼が教うる処、其の高識が故に選びぬ。
 彼妃に向かい、憶せず答えぬ。「神、
 人等が救い主の貴女に、魂の勝利、

智慧の力授け給いし今、いと尊き女王よ、
 神が御言葉、聖なる秘密、心に 1170
 留めさせ給い、王の命ぜらる處、
 誠籠めて執り行われし事、正しき事なり。
 かの釘、地上の王、城持てる人がうち、
 最も高潔なる者に命じて、其の馬の轡に
 馬^{はみ}銜とて付けさせるがよし。 1175
 其の事、広く此の中が世に
 数多の人に知る處とならんは必定、
 戦いにて猛き武士、武器持てる仇の
 勝利求めて相対し、
 双方戦い求めてかの王、 1180
 居並ぶ敵逃さず打ち果せし折りに。
 彼戦いに武運あり、
 争いに勝利収め、至る處に平和を、
 戦いに身は危難を免がれん、
 武運の名挙げたる人等、槍の嵐が裡に 1185
 歴戦の武者等、楯に槍持ち進む時
 白馬に跨り、先頭に手綱持つ者は。
 これ、皆ての人にとり、恐怖に立ち向かう
 や、負け知らぬ武器となるは必定。
 これに就き、彼の予言者等の、 1190
 深き賢き知慧もて歌いし事あり——其の心、
 知慧の理解、深く進みいたり——彼の斯く言う。
 「此の王が馬、勇武なる者のうちに
 尊き馬^{はみ}銜、手綱輪もて飾られし事、知れ
 渡らん。彼の徴^{しるし}神に捧げられしもの、 1195
 其の馬進むる勇猛の人、武功を挙げん。」と。
 エレネここにて、これ一切、人等が前に
 し終んぬ。主公、武者に環授くる人が手綱
 飾れと命じ、己が自身、息^こが許へと
 海の潮越え輝やかしき恵み、贈物とて遣わしぬ。 1200
 又妃、命下して、ユダヤ人等が中、
 世の人等が中、己が知る

最も秀れたる者等、集いてかの聖なる町へ、
 かの城市へ来たれと。女王、その愛でる
 人等が集まりに^{むか}対して教う、汝等 1205
 その存命中罪犯さず、主の愛と平和、
 又互いが^{うち}間の^{なかけ}友情確かと守り行い、
 又先達が教え、学あるキリアクスの
 汝等に宣せしキリスト教が
 慣わしに従えと。司教が座、 1210
 見事に打ち樹てられぬ。しばしば
 彼が許へと、遠方より来りしは、
 跛者、中風者、弱く衰えし者、
 足引きずる者、血に塗れし者、
 癩病む者、盲いの者、貧しき者、 1215
 心悲しめる者。常に彼等、司教より
 永久に^{とわ}癒され、慰め授かる。更に
 故郷へ帰らんと旅志せし折りに、
 彼に価高き贈物授け、此の王国にて
 神嘗むる人等、男にも女にもなべて、 1220
 命じて言う、汝等、心と力、
 胸中の思い籠め、かの日、かの聖き
 十字架の、葉のもとに繁り地中より
 伸び出でて、木がうち最もめでたきもの、
 その見出されし日を敬すべし、と。 1225
 時に、春過ぎ去りて、五月の月、
 夏が到来に六日余すのみ。
 諸^{もろ}人に、地獄の戸の閉まり、
 天の戸の開かれ、天使等が国
 永遠に開かれ、喜びは^{とわ}永久に、 1230
 其の運命、マリアと共に定め
 られんことを、万物のいと強き支配者、
 その上に^{もううで}双腕^{うで}拡げさせ賜いしかの
 天が下いよ貴き十字架、その
 祭りの日心に留む者にはおしなべて。了。 1235

斯くの如く我、齡重ねて、此の
 うつろい易き肉が故、世を去らんとする今、
 此の詩の技、織り成し又不可思議なる様
 もて奇せ集め、時に苦吟し、思う処
 ふるいにかけてぬ、夜眠もやらず苦しみて。 1240
 我此の十字架が真実に就き定かに知らねど、
 やがて知慧、輝やかし力にて我が心が
 思いに、より広き知識顕わしぬ。
 我れ罪業に穢れ、罪の枷はめられ、
 悲しみに苦悩し、いたく縛られて四面楚歌 1245
 なりしが、力の王、光り輝きて我に教え
 垂れ賜う、老いし身慰めんとめでたき
 贈物下し又注ぎ込み賜い、其の輝き顕わし、
 時に殖やされ、此の肉体が縛め解き、
 胸の鎖ほどき、詩の技が道開き賜いしに、 1250
 我此の世に嬉しく心勇みて、そを用いぬ。
 我此の栄光が木、一度ならず頻りに心中に
 思いぬ、かの輝く木が不思議の、書が内に、
 年月の流るうち、かの勝利の徴に就きて
 世に知らせんと書かれしものの内に、在るを 1255
 我が見出せし通り世に顕わす迄は。されど、
 其の時迄苦闘続き、押し寄す悲嘆の波に翻弄
 され、勇士、火勢衰えし松明(C)の如し、彼
 宴席の館にて宝物を、丸やかに浮き彫れる
 黄金細工受けし事あれど。彼 1260
 身の禍い(Y)、免がれざる輩(N)歎き、
 苦境、重苦しき秘事を忍びぬ、
 己が前に騎馬(E)おき幾哩の道を馳け、
 細鉄の飾りつけ、勇ましく走れるに。
 喜び(W)衰え、数多年月経れど快樂又而り、 1265
 少壮の光彩嘗て我等がもの(U)なりき。今や
 往昔の日々、定めの時経るや消え去んぬ、
 生命の喜び尽きぬ、水(L)の、風に吹かるる

^{たい}大水の、滑り流る如くに。富（F）は天空が下、
 諸人にとりてうつろい易きもの。此の 1270
 地上のめでたき宝物、天空が下に失せ
 去る事、さながら風の、人等が前に音高く
 立ち、雲の辺りを徘徊し、怒風となりて
 吹き荒れ、突如力に抑され、獄舎が内に
 出ずるすき無く閉ち込められ、元の 1270
 静けさの訪るるによく似たり。
 斯くて此の世皆て失せ去り、
 又同じく其処に生まれし者、
 業火これを包みて滅さん、
 主自ら、天使が群れ連れて 1280
 審判求めらる折りに。
 其処にては万^{よろず}の人、一人残らず
 裁き主が口づより、其の行いし処に就き
 余さず^{まこと}真実聞き、又その昔、口より
 愚かしくも吐かれし言葉の皆て、 1285
 恥知らずが思い一つ余さず
 其の責めを問われん。其の時、
 火に包まれて此の広き地上に
 在りし人等、残らず三つに
 分たれん。真^{まこと}の信仰持つ人等、 1290
 祝福されし人々、栄光頻りに願う人等
 其の業火の最も上に姿見られん。
 かくて彼等、勇ある人々が群れ、
 耐えと苦しみ無く、安んじて
 凌がん。彼等にはいと快く、其の身に 1295
 いと穏やかなる如く其の火の炎、皆て
 和らげられん。罪深き者等、
 悪に染みて、心悲しき人等、熱き焰の
 寄する中へと、煙に巻かれて真中にて
 罰受けん。第三が群れ、忌むべき 1300
 罪に染まりし者等、焰の底にありて
 人憎む偽りの者等、昔の行い故に火に

捉われ出る事叶わず、神知らざる輩、
 炎に身の自由奪われて。それより彼等が事、
 刑罰の場より決して神、栄光が王、の 1305
 御心に浮かばず、かの猛き炎より彼等、
 不俱戴天の仇、地獄が奈落へと
 落とされん。先の二つの群、これに
 等しからず。彼等天使の主、勝利の神
 が御姿見ることを得ん。彼等純金の、 1310
 炉の中に炎により一切の穢れ清められ、
 錬り上げられ、溶かさるる如く、
 不純なるもの落とし、罪より放たれん。
 其の人等、かくて、審判の煉火に
 なでて其の皆ての罪、重罪より放たれ、 1315
 彼等それより後、平和を、永久の弥栄
 を享けん。彼等に、天使等が支配者
 情けかけ、恵み垂れ賜わん、そは彼等
 皆ての悪業、罪の行いを憎みて
 御息に言葉もて呼び掛けし故にこそ。 1320
 故に彼等、今天使等に似て、美々しく輝き、
 栄光が王の遺されしもの、永久に享けん。アーメン。

(訳了1976. 9. 1)

主たる文献

P.O.E. Gradon: Cynewulf's *Elene*, Methuen, 1966 (底本)

R.K.Gordon: Anglo-Saxon Poetry, Dent, 1964

C.W.Kennedy: Early English Christian Poetry, NY Oxford UP, 1968

C.W.Kennedy: The Poems of Cynewulf, Peter Smith, 1949

C.W.Kent: Elene, an Old English Poem, Ginn & Co., 1889

G.P.Krapp: The Vercelli Book, Columbia UP, 1961

松浪 有：英語史研究、松柏社